

## 奥村哲氏報告へのコメント

松重充浩

### 1

シンポジウム当日における筆者の奥村氏報告に対する全体的な印象は、同氏自身により既に提示されてきた成果を前提に<sup>1)</sup>、近現代（19世紀末から改革開放政策期に至る）中国農村の社会統合が如何なる諸段階を経て展開したのかを、農村における諸階層の実相に配視しつつ明示した、というものだった。その具体的な内容は、本誌本号における奥村氏自身の論攷で明示されているはずであり、そちらを参照して頂きたい。

以下では、シンポジウム当日、筆者が奥村氏報告に対して持った所感を、共感と質問（報告者への更なる希望）に分けて述べることで、コメンテーターとしての責を塞ぐこととした。

### 2

まず、筆者の共感点は、近現代中国農村における社会統合展開の特徴理解に際して、「階級」ではなく「階層」の実相的把握からのアプローチがより有効的であることを示された点である。より具体的には、奥村氏が、中国農村における歴史継承態としての「階層」の実相（即ち、構成員の個別主義的心性の強さと共に、組織性の低さと流動性の高さ）に着目することで中国農村における持続的・固定的な「階級」を実体として摘出することの困難性を確認しつつ、その困難性にも拘わらず中国共産党が何故「階級」を槓杆に従来の公権力に比して相対的に強力な統合をなし得たのかの理路を明示した点である。

従来にない規模と深度を持つ社会的利害関係の発生をもたらした日中戦争を重要な転換点としつつ、拡大深化する農村内利害対立に対する処方箋として、中国共産党が敵と味方を峻別する装置として農村に言わば「持ち込んだ」ところの「階級」は、中国農村が前述

---

<sup>1)</sup> 奥村哲『中国の現代史：戦争と社会主義』（青木書店，1999年），同「民国期中国の農村社会の変容」（『歴史学研究』779号，2003年9月）。

した歴史継承態の実相を持っていたゆえに社会統合上極めて有効に機能したとする、奥村氏の論旨は極めて説得力に富むものだった。別言すれば、奥村氏報告は、中国農村の社会統合において「階級」と称されていたものの歴史的実態を中国史に即して明示しているのである。それは同時に、本報告が、今や自明ともなっている所謂「中国共産党革命史観の相対化」を実証的実態把握の成果に基づき改めて遂行した成果であることを示すと共に、対象社会と異なる社会実態から高度に抽象化された概念を実践的に導入・適用すれば対象社会に如何なる変容と結果が生ずるのかという、広義の文化移転史的分析へのパースペクティブを持つものであることも示していると言えよう。

### 3

次に、質問（報告者への更なる希望）であるが、「社会主義的統合」が結果としてもたらした中国農村における変化の持続性（安定性・強靱性）に関してである。

奥村氏報告では、ある種の「身分的編成」的意義に着目するという、注目すべき見解も含みつつ「社会主義的統合」の進展過程が明示されている。前述したとおり、日中戦争を重要な転換期に見据えて提示された、この過程に対する奥村氏報告の論理的展開には説得力があり、筆者もそのこと自体に異論はない。

ここで筆者が問題としたいのは、その変容の「成果」は、開放改革期以降の今日、さらには今後も持続力を持ち得るものなのか、持つとすればどの程度持ち、如何なる方向に中国農村を傾動化させるものなのかという点である。別言すれば、「社会主義的統合」期が、開放改革期以降の中国農村において持つ歴史的意義に関する具体的な見通し如何という点である。

周知の通り、開放改革期以降の中国を概観すれば、あたかも「先祖返り」と思わしき諸状況が頻出している<sup>2)</sup>。斯様な状況は、「社会主義的統合」を言わば正当化させていた冷戦構造（「極限的総力戦態勢」）の解体後、「社会主義的統合」の諸成果が、その政策推進の主要な槓杆を喪失したことにより「伝統中国の強靱な生命力」に急速に「掃討」されつつあることの証左であるとの仮説を生じさせ得るものでもある。この仮説にたてば、日中戦争から「社会主義的統合」に至る過程において現出・展開した中国農村の諸事象は、中国農村の「基層構造」からすれば正しく表層的なものでしかなかったとする評価も成り立つこととなる。同過程が現代中国農村社会に対して持つ歴史的画期性は低いものだったということである。

奥村氏自身は報告の中で、「先祖返り」的状況の頻出をふまえた上でなおかつ、具体的な事例（明瞭な土地区画、公共社会資本、等々）の存在を前提に現代中国農村が「1949以前の農村とは異なる」点を強調されていた。さらに、その「異なる」点が、今後の「村民自治」

<sup>2)</sup> 一例をあげれば、奥村氏報告でも取り上げられた公権力と「攤款」との関連がある。この点に関しては、現代中国における歴史規定要因への配視の重要性に言及した、本野英一「アジア的税思想とは何か：中国の事例から」（『別冊環』7号、2003年11月）を参照されたい。

の基盤と成り得る可能性も示唆されていた。これらの奥村氏の指摘は、「社会主義的統合」が結果として、既存中国農村社会の構造内部的变化に止まらず構造推転的变化をも展望し得る可能性を持つものだったことを示唆するものとなっていると言えよう。

だとすればなおさら、「1949以前の農村とは異なる」諸事例が、「先祖返り」に対して抑制力とし機能し得る如何なる「質(安定さと強靱さ)」を持って存在しているのかについて、より具体的に明示して頂きたかった。

この点の明示は、現状分析を正面に据えた菱田雅晴氏報告の成果を歴史的に位置付ける上からも是非とも言及してもらいたかった点でもある。

#### 4

以上、大変雑駁な「印象論」を出ない議論となったが、これでコメントとさせて頂くことにしたい。また、シンポジウム当日は、「階級」概念の今日的水準、等々、私のコメントに対する貴重なご意見をフロアーから頂いた。記して感謝の意を表したい。しかし、誠に遺憾ながら、私の怠慢から本稿に活かすことが出来なかった。併せて、ご寛恕を願う次第である。

(まつしげ みつひろ・日本大学文理学部)